

# KOBEの本棚

第 79 号 平成 27 年 3 月 20 日  
編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町 7-2-1 (078)371-3351



元町3丁目商店街のメッセージ入りレンガ

## 足元のメッセージ

阪神・淡路大震災から二十年が経ち、被災各地には、鎮魂の祈りや励ましの想いをこめた慰霊碑・モニュメントが数多く設置されました。

元町商店街の歩道には、全国から寄せられた励ましのメッセージを焼き付けたレンガがはめ込まれています。震災で壊れた道路をメッセージ入りのレンガで修理しよう、と一九九五年に神戸市内の青少年団体が始めた「神戸レンガプロジェクト」で全国に寄付を呼びかけたものです。

元阪神タイガースの村山実さん、元衆議院議員の土井たか子さん、映画評論家の淀川長治さんら、今は亡き神戸ゆかりの著名人も参加しています。

約九千個のうち人通りの多い場所に設置されたレンガは、損傷のためやむなく撤去されました。しかし、何とかレンガを残したいという住民・商店主の要望で、二〇〇三年に強度の強いレンガに焼き直されました。

このような震災に関わるモニュメントを紹介した『震災モニュメントめぐり』『思い刻んで』『震災モニュメントマップ』などの図書は、中央図書館でご覧いただけます。

春よめぐれ—安水稔和詩集 (編集工房ノア)

阪神・淡路大震災直後から現在までに書き続けた詩集の中から震災に関する百三十編を<sup>あ</sup>ひまどめてある。「亡くなった人たちの記憶のために、生き残った私たちの記憶のために、死者とともにわたしたち生者がとにもよく生きるために」という著者の思いが、届けられる。

笑顔の老いを支え合う (新日本出版社)

長田区の駒ヶ林町に「駒どりの家」という宅老所がある。一九九〇年から一人暮らしの高齢者に昼食会を行ってきた。震災時もすぐに再開し、高齢者の心身の抛り所となった。著者はここに定期的に通い、お年寄りとボランティア一人一人からこれまでの人生を聞き、雑誌『ラジオ深夜便』に連載した。水害、空襲、震災を経験し乗り越えてきた人々の言葉が心に響く。彼らは「駒どりの家」に集い語り合うことを何より楽しみにしており、そこには誰が利用者で誰がボランティアか分からないというなるとも温かい雰囲気漂う。



311情報学—メディアは何をどう伝えたか 高野明彦 吉見俊哉 三浦伸也 (岩波書店)

東日本大震災の際は、多くのメディアが被害の状況をリアルタイムで大量に報道した。また個人レベルにおいてもインターネットの活用により、さまざまな情報発信がなされた。

本書ではニュース報道をデータ分析し、報道が集中したエリアやそうでないエリアを浮かび上がらせている。また、これらの報道や各種情報をどう後世に残していけばいいのかも模索する。



復興へ災害—阪神・淡路大震災と東日本大震災 塩崎賢明 (岩波書店)

家を再建し生活を取り戻す「復興」までに起こる災害後の被害を「復興災害」と呼ぶ。本書では、三部構成でこの復興災害について検証・提言を行っている。

第1部は孤独死と新長田駅南地区再開発など阪神・淡路大震災から二十年後の状況を、第2部では東日本大震災での住宅復興と復興予算による復興災害の現状を紹介している。第3部では、今後予想される巨大災害に向けて復興災害を繰り返さないための備えとは何か述べている。

震災脚本家菱田シンヤ (エピック)

著者は神戸出身の劇作家・脚本家で、「劇団 NINWATORI」を経て現在は「神戸の劇団 vintage」を主宰している。

平成六年に神戸で劇団の旗揚げ公演を行うが、その直後に震災に遭う。劇場も稽古場も観客もないまま脚本を書いた日々。

震災から二〇年。幾多の苦難を乗り越えてきた著者の目を通して振り返る自伝的エッセイである。



大災害と在日コリアン—兵庫における惨禍のなかの共助と共生 高祐二 (明石書店)

書名から思い浮かぶのは関東大震災後の虐殺事件であろう。在日三世の著者も二十年前、瓦礫に埋もれながらこのことを思い浮かべ恐怖したという。しかし、例外はあるものの、阪神・淡路大震災時、日本人と在日外国人は同じ被災者として共に助け合うことができた。

著者は地震・台風・豪雨などの災害時に在日が日本人にどう扱われ、またどう行動したか、新聞や災害記録の記事を丹念に拾い上げる。多民族が暮らす現代日本、共生のために必要なことは何なのか、解答へのヒントが用意されている。





減災の知恵―阪神から東日本へ 金芳外城雄 (晃洋書房)

神戸学院大学教授である著者は、元神戸市職員。本書は、東日本大震災が起きた年に刊行された。その目的は阪神大震災の復旧・復興過程で学んだことを若者たちに生きる知恵として伝えていくとともに、東日本大震災について学ぶことである。

「公の限界」「守るべき」とは「いざそのとき」ほか全十三章で構成されている。各章には「行動四原則」「うつ対策」「原発事故対応」「避難高齢者」といった見出しが並び、震災当時の状況、課題、提言が詰まっている。

震災から二十年が経つ今、気になる項目の頁を開き「減災」について再検証してみても如何だろう。

小さな声をつなぐ―災厄の現場から震災・まちのアーカイブ編刊

「震災・まちのアーカイブ」は資料の収集・保存活動において、被災者たちの記憶の集積と伝承が重要と考へ活動してきたグループ。本書は東日本大震災の地で「歴史実践としての陸前高田フォーラム」を主宰する川内氏を迎えてのトークイベントの記録である。

大災害の出来事の中では埋もれてしまいがちな日常の記録や記憶を、丁寧に掬い上げることの意味を見出す視点が新しい。

みらいへつなぐ―to be きずな・いのち・おもい―阪神・淡路大震災から20年 神戸市教育委員会

震災二十年の節目に発行された学習テキスト。震災を経験していない神戸市内の小・中学生に、防災の大切さを学んでもらうために作成された。地震発生に始まり、人命救助の状況や様々な支援、復興の様子など、写真を多く掲載し、当時の状況がわかりやすくまとめられている。神戸ゆかりの著名人から、小・中学生へ向けたメッセージもあり、読み応えのある内容となっている。

II その他の新刊 II

私のたたかい―語り継ごう！書き残そう！阪神・淡路大震災から20年 (交友プランニングセンター・友月書房)

翔ベフェニックス2 阪神・淡路大震災記念協会編集 (ひょうご) 震災記念21世紀研究機構  
古地図が語る大災害―絵図・瓦版で読み解く大地震・津波・大火の記憶 本渡章 (創元社)

神戸あんな人こんな人 その ③

黒田裕子さん 昭和16年(1941年) ~ 平成26年(2014年)

黒田裕子さんは、阪神・淡路大震災以降、震災ボランティアとして被災者支援に尽力し、災害看護のあり方を確立した人物です。宝塚市立病院副総婦長時代に阪神・淡路大震災に遭ったことをきっかけに退職し、神戸の被災地でのボランティア活動に身を投じました。西区の大規模仮設住宅で孤独死や震災関連死を防ぐために戸別訪問や交流の場作りを行い、24時間体制で高齢者や障害者を見守りました。被災者が復興住宅に移ってからも支援を続け、時には泊まり込みで寄り添ったといいます。また、大災害が起こると国内外問わず被災地域に赴き救護活動に奔走し、その一方、災害看護の分野で後進の育成にも力を注ぎました。多大な功績を残して、昨年9月、肝臓がんのため73歳で亡くなりましたが、その活動が評価され、同12月、東遊園地内にある「慰霊と復興のモニュメント」の特別枠に故貝原前兵庫県知事とともに黒田さんの銘板が新たに加わりました。



主な著書 『災害看護：人間の生命と生活を守る』 共著 (メディカ出版)

東遊園地

神戸市役所の南、フラワーロードの西が東遊園地です。毎年一月七日の阪神・淡路大震災の追悼行事会場のひとつであり、また、十二月の「神戸ルミナリエ」開催の場ともなります。

東遊園地は、居留地の東にあることがその名前の由来となっており、「遊園地」という言葉が使われていますが、今日の遊戯施設などのある場所のことではなく、「公園」を意味します。幕末から明治初年にかけて、西洋風の公共的な公園を当時「遊園」「遊園地」と呼んでいました。

慶応三（一八六八）年兵庫（神戸）が開港。翌年六月外国人居留地が竣工し、永代借地の競売が開始されます。現在残っているイギリス人土木技師J・W・ハートの居留地設計図を見ると、居留地の東にレクリエーション・グラウンド、西にパブリック・ガーデンが描かれています。居留地に住み始めた外国人たちは、スポーツのできる広い公園の開設を

求めますが、公園が設置されるのは明治八（一八七五）年八月のことで、この時、日本側と各国公使の間で交わされた議定書には、「居留地内にある遊園地は、内外人公園地と称す」と書かれています。公園は無償で貸与され、維持費用の負担や管理は居留地外国人が行うことになりました。

明治三二（一八九九）年条約改正により居留地が返還されると、公園は神戸市の管理下となり、名称は「加納町遊園地」となりました。その後、大正十一（一九二二）年九月、それまで「居留地公園」「元居留地遊園地」「東遊園地」などとも呼ばれていましたが、神戸市告示で「東遊園地」が正式な名称になります。太平洋戦争が始まると、防空演習や軍用に使われ、終戦後は進駐軍に接収されますが、昭和三二（一九五七）年、公園の北に神戸市役所や市会議事堂などが建てられました。このとき、本庁舎の北側には、日本で最初の花時計が設置されます。その後、公園の再整備が進み、地下駐車場が設置され、昭和四八（一九七三）年にはほぼ現在のかたちとなりました。

園内には、ボウリング発祥地の碑

や近代洋服発祥地の碑、震災関係などのさまざまな記念碑が建っています。その中にスコットランド人アレキサンダー・キャメロン・シムの顕彰碑があります。シムは居留地でシム商会を設立し、ラムネの製造販売をした人物です。また、優れたスポーツマンで、アーサー・H・グールドなどとともに関与しています。

シムは居留地で本格的なスポーツクラブ「神戸レガッタ・アシンド・アスレチック・クラブ」を設立しました。グループは六甲山の開発や日本で最初のゴルフクラブを創設したことで知られる人物です。シムの碑は明治三四（一九〇一）年、彼の経歴と功績をたたえ、友人たちにより建てられたものです。碑には

漢文で、「シムは公平誠実で自他の幸福を思い、各地の災害を耳にするたびに有志をつのり、義捐に力を尽くした」と刻まれています。その例として明治二四（一八九一）年の岐阜県西部を震源とする濃尾地震や明治二九（一八九六）年の三陸沖地震による津波があげられています。いずれも被害は甚大でした。

阪神・淡路大震災は「ボランティア元年」と言われますが、百数十年前、すでに外国人たちが日本人のためにボランティア活動を行っていたことに驚かされます。また、東遊園地が今、震災の慰霊と追悼の場になっていることを思うと歴史の巡り合せの不思議さを感じずにはいられません。

東遊園地は、平成二三（二〇一一）年に名勝地関係の国の登録文化財（登録記念物）になりました。日本でもっとも古い近代公園のひとつで、区画が当時のまま残されていることが登録の理由となっています。登録文化財制度は、国土開発や都市計画、生活様式の変化により、社会的評価を受けることなく消滅の危機にある近代の文化財を後世に継承するため、国が文化財登録原簿に登録するものです。

東遊園地が開園して約一四〇年。居留地外国人が楽しんだラグビーやテニス、野球などがここを窓口に広まり、居留地返還後は、外国人と日本人の文化やスポーツの交流場所として利用されました。震災後は慰霊と震災の記憶を伝える場となります。東遊園地は、市民の憩いの場であるだけでなく、神戸の歴史が詰まった空間でもあるのです。

参考文献『東遊園地と居留外国人』（神戸市教育委員会）ほか